

原著：秋田大学医短紀要10(1)：33-40, 2002

連想語検査による看護学生の病人に対するイメージの分析 —縦断的にみた病人イメージの変化—

石井 範子 平元 泉 長谷部 真木子

要 旨

看護学生の「糖尿病患者」「癌患者」「精神分裂病患者」に対する連想語検査を縦断的に行い、看護教育の段階に応じた病人イメージの変化の仕方を検討した。

対象は看護系短期大学の1年生78名、2年生71名、3年生63名であった。

その結果、以下の結論を得た。

- 1) 「病人」をみた経験を有する学生は3年が最も多く、病人は主に入院患者であった。「精神分裂病患者」についての経験は3年以外ではさきわめて少なかった。
- 2) 連想語数はいずれの病人に対しても3年が最も多かった。
- 3) 連想語は、学年の進行に伴って“客観的反応”を示す内容が多くなっていた。

1. はじめに

看護の対象である人間について、Rogersは「構成する部分の総和以上の存在であり、一つのまとまりのある全体または統合体である」と述べている¹⁾。そこで、看護基礎教育の基本とするねらいは、看護の専門的知識・技術の教授に加え、対象を全体的に捉えて対応できる態度の形成にあるものと考えられる。

看護学の体系的な学習によって看護学生の人に対する知識・理解・イメージは量的・質的に変化することがいくつか報告されている²⁾³⁾⁴⁾。我々はかつて看護を専攻する学生と専攻しない学生の「糖尿病患者」「癌患者」「精神分裂病患者」に対するイメージをSD法⁵⁾および連想語

検査⁶⁾によって比較検討し、看護を専攻する学生はより好意的な病人イメージを抱き、さらに看護の専門教育によって病人についての知識の習得と共に援助者としての意識や態度が形成されていることを明らかにした。

今回は、看護系短期大学学生の「糖尿病患者」「癌患者」「精神分裂病患者」に対する連想語検査を縦断的に行い、看護教育の段階に応じた学生の病人イメージの変化の仕方を検討したので報告する。

II. 研究方法

1. 対象：本研究の主旨に同意したA短期大学看護学科1994年度入学の1年生78名、

秋田大学医療技術短期大学部
看護学科

Key Words: 病人イメージ
連想語検査
看護学生

2年生71名, 3年生63名である。

2. 調査方法：無記名の以下のような内容の質問紙用い, 教室で一斉方式で回答させた。調査にあたった者は同一人であった。

3. 調査内容

- 1) 対象者の属性：学年, および「糖尿病患者」「癌患者」「精神分裂病患者」をみた経験の有無とその病人との関係を記入させた。なお、『みた』という内容には「見たことがある, 詳しく観察したことがある, 接したことがある, 看護をしたことがある」等が含まれると考えられるが, 回答の方法としては『みた』の内容は区別せず, 経験の有無だけを答えるものとした。

- 2) 各病人に対する連想語を5語以内ずつ記述させた。

4. 調査時期：1年時は6月初旬, 2年時は

専門科目の講義が終了した2月, 3年時は臨床実習終了後の11月下旬であった。

5. 分析方法

- 1) 病人をみた経験を学年毎に単純集計した。
- 2) 各病人に対して, 学年毎に想起された連想語数の平均値を算出し, 多重比較により学年間の差を検討した。
- 3) 連想語を内容別に分類した。さらに「こわい, いやだ, なりたくない, 関わりたくない」等の『情緒的反応』に属する連想語を, 知識の乏しい“主観的反応”を示しているものとみなし, それ以外の『不適切』を除くカテゴリーの語を知識に基づいた“客観的反応”を示しているものとみなした。“主観的反応”に属する連想語数と“客観的反応”に属する連想語数について, χ^2

表1 「病人」をみた経験を有する学生

(): %

		1 年 n=78	2 年 n=71	3 年 n=63
糖尿病患者		24 (30.7)	20 (28.2)	33 (52.4)
病人との関係	祖父	10	9	7
	父	0	1	1
	母	0	0	0
	近所の人	4	0	0
	入院患者	0	6	25
その他	10	5	3	
癌患者		36 (46.2)	34 (47.9)	54 (85.7)
病人との関係	祖父	26	18	17
	父	3	4	2
	母	0	1	0
	近所の人	2	1	1
	入院患者	0	8	42
その他	5	10	3	
精神分裂病患者		2 (2.6)	0	39 (61.9)
病人との関係	祖父	0	0	0
	父	0	0	0
	母	0	0	0
	近所の人	2	0	0
	入院患者	0	0	39
その他	0	0	0	

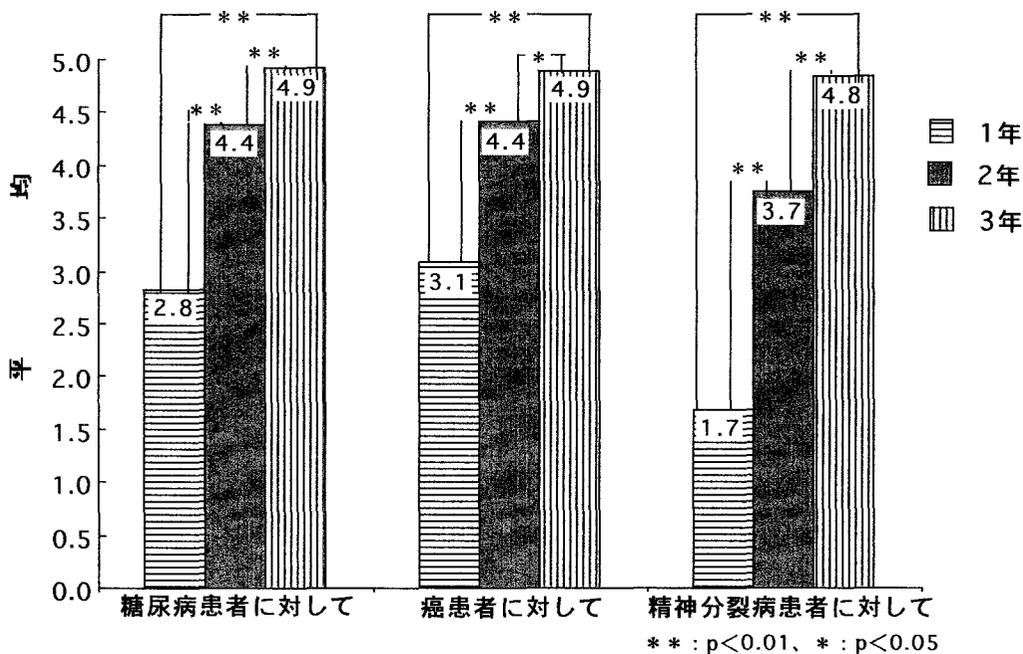


図1 想起された連想語数

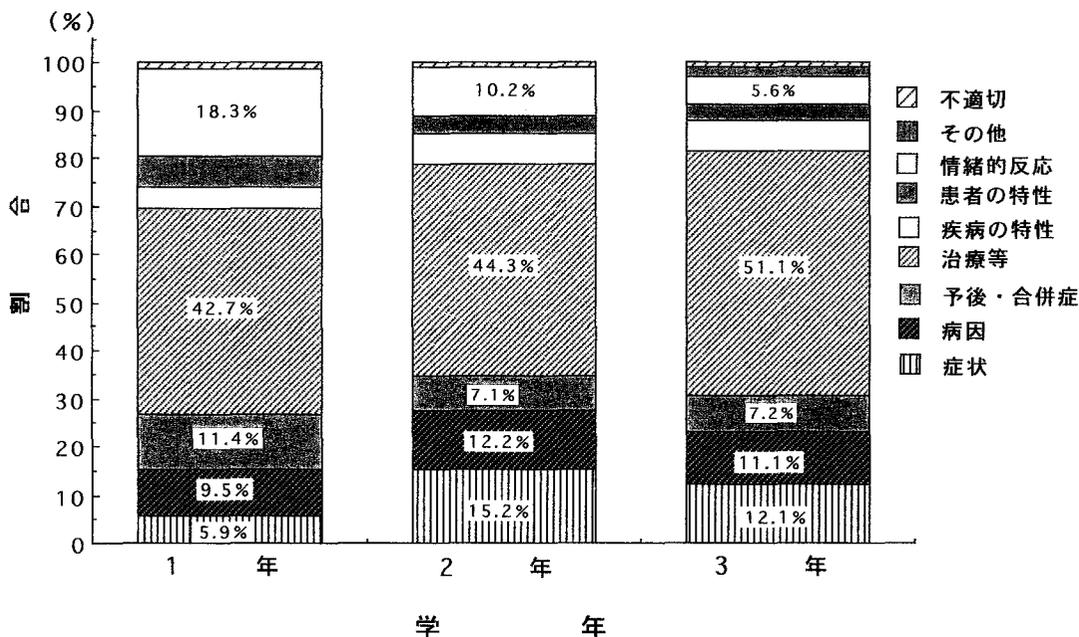


図2 糖尿病患者に対する連想語の分類

(36)

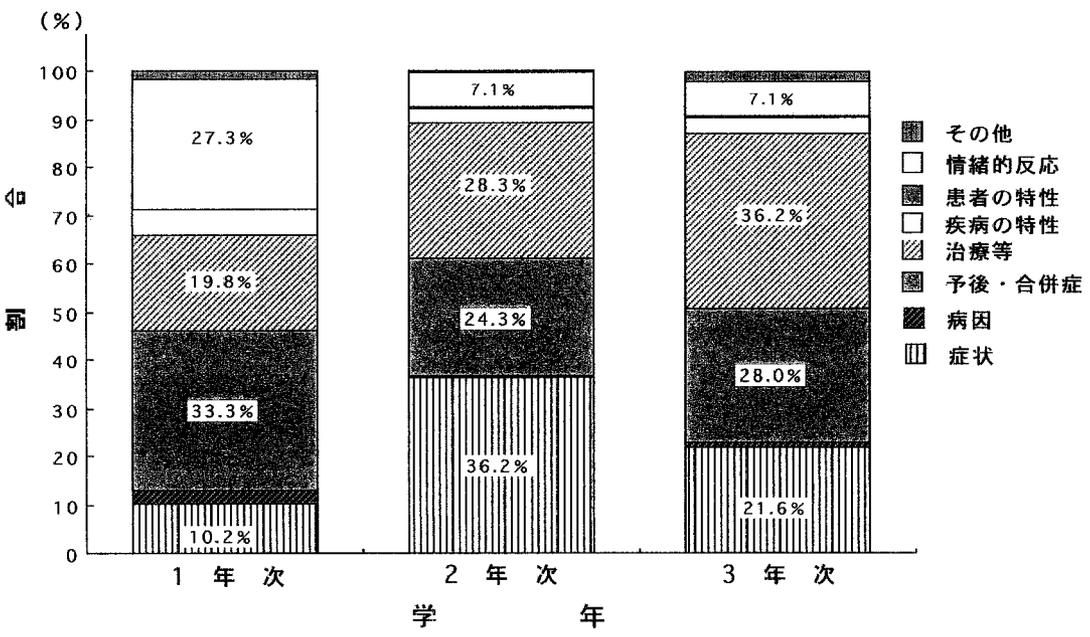


図3 癌患者に対する連想語の分類

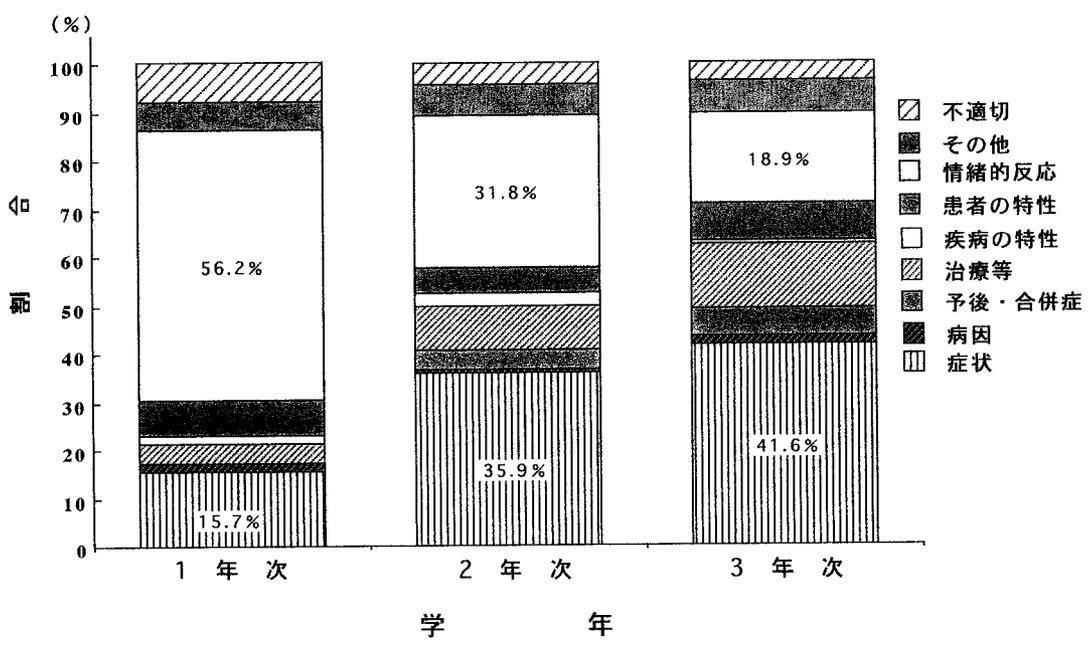


図4 精神分裂病患者に対する連想語の分類

検定により学年間の差を検討した。

Ⅲ. 結 果

1. 病人をみた経験

病人をみた経験は、いずれの病人についても3年が最も高い割合を示していた。「糖尿病患者」について1年30.7%, 2年28.2%, 3年52.4%であった。「癌患者」では1年46.2%, 2年47.9%, 3年生85.7%であった。「精神分裂病患者」では1年2.6%, 2年は経験した者はなく, 3年は61.9%であった。みた病人は、いずれの病人の場合でも1・2年生は祖父母・近所の人等であり, 3年は多くが実習中にみた入院患者であった(表1)。

2. 連想語数の比較

想起された連想語数の学年別の平均値は、「糖尿病患者」については、1年が2.8語, 2年4.4語, 3年4.9語であった。「癌患者」については1年3.1語, 2年4.4語, 3年4.9語であった。「精神分裂病患者」については1年1.7語, 2年3.7語, 3

年4.8語であった。いずれの病人に対しても3年は1・2年より, 2年は1年より多く, それぞれ有意な差がみられた。また、いずれの学年も「糖尿病患者」と「癌患者」についてはほぼ同数の連想語であったが、「精神分裂病患者」については、1・2年は他の2つの病人に対する連想語数よりも少なく, 3年は他の2つの病人についての連想語数とほぼ同数であった(図1)。

3. 連想語の内容

連想語は『症状』『病因』『予後・合併症』『治療(看護)・検査・予防』『疾病特性』『患者の特性』『情緒的反応』『その他』『不適切』の9カテゴリーに分類された。

「糖尿病患者」については、3学年共に「食事療法, インスリン注射, 血糖値」等の『治療・検査・予防』に属する語が半数近くを占めていた(図2)。

「癌患者」については、1年は「死, 早期発見, 末期」等の『予後・合併症』に属する語が, 2年は「痛み, 痩せ」等の『症状』に属する語が,

表2 病人に対する連想語の内容

(): %

		1 年	2 年	3 年	χ^2 検定
糖 尿 病 患 者	主観的 反応を 示す 連想語	40 (18.3)	31 (9.4)	17 (5.6)	p<0.01
	客観的 反応を 示す 連想語	179 (81.7)	298 (90.6)	288 (94.4)	
	合 計	219	329	305	
癌 患 者	主観的 反応を 示す 連想語	51 (27.3)	22 (7.1)	20 (7.1)	p<0.01
	客観的 反応を 示す 連想語	136 (72.7)	287 (92.9)	262 (92.9)	
	合 計	187	309	282	
精 神 分 裂 病 患 者	主観的 反応を 示す 連想語	68 (56.2)	78 (31.8)	53 (18.9)	p<0.01
	客観的 反応を 示す 連想語	53 (43.8)	167 (68.2)	228 (81.1)	
	合 計	121	245	281	

3年は「抗がん剤、化学療法、放射線療法」等の『治療・検査・予防』に属する語が高い割合を示していた(図3)。

「精神分裂病患者」については、1年は「こわい、よくわからない、危険」等の『情緒的反応』に属する語が56.2%、2年は「妄想、殺人犯、幻覚」等の『症状』に属する語が35.9%、『情緒的反応』が31.8%とほぼ同数で、3年は『症状』に属する語が41.6%であった(図4)。

4. 連想語の内容の比較

「糖尿病患者」について、知識の乏しい“主観的反応”とみなされた連想語は、1年40語、2年31語、3年17語で、知識に基づいた“客観的反応”とみなされた語は、1年179語、2年298語、3年288語であった。

「癌患者」では“主観的反応”は1年51語、2年22語、3年20語、“客観的反応”は1年136語、2年287語、3年262語であった。

「精神分裂病患者」では“主観的反応”は1年68語、2年78語、3年53語で、“客観的反応”は1年53語、2年167語、3年228語であった。

“主観的反応”を示す連想語数と“客観的反応”を示す連想語数の学年間の比較では、「糖尿病患者」「精神分裂病患者」については学年の進行と共に“客観的反応”を示す語が有意に多くなり($p < 0.01$)、「癌患者」については2年・3年が同じ割合で1年より多く有意な差がみられた($p < 0.01$) (表2)。

IV. 考 察

看護系短期大学の1年生から3年生まで縦断的に、想起した「糖尿病患者」・「癌患者」・「精神分裂病患者」に対する連想語を基に病人についての経験と連想語の関係、看護教育の段階に応じた病人イメージの変化の仕方を考察する。

1. 病人についての経験と連想語数の関係

病人をみた経験も連想語数も最も多かった3年は、看護学の教育課程の終了段階にあり、獲得した知識の量や臨床実習における患者との関わりから、病人について連想することは1・2年より容易であったものと考えられる。2年は病人をみた経験は1年とほぼ同様であったが、

各疾患患者の理解に関する講義で知識を習得しており、1年より連想語数が多かったものと察せられる。

2. 看護教育の段階と病人イメージの変化

想起した連想語は、1年では「こわい、いやだ、なりたくない、関わりたくない」等の『情緒的反応』、いわゆる主観的反応を示す語の割合が高かった。また、2年・3年では『症状』『治療・検査・予防』等の知識に基づいた“客観的反応”を示す語の割合が高かった。我々が今回と同じ学生に縦断的に実施したSD法によるイメージ調査⁷⁾でも、1年が癌患者・精神分裂病患者に対して対人印象因子で高得点であったことと類似している。すなわち、看護学の専門科目の授業をほとんど受けていない段階では、病人を外観等から直観的にイメージする傾向にあるものと考えられる。2年と3年は“主観的反応”および“客観的反応”を示す語の割合は糖尿病患者・癌患者に対してはほぼ同様であったが、精神分裂病患者に対する“主観的反応”は2年が3年より多かった。2年では精神分裂病や精神分裂病患者の看護について講義を受け、知識は習得しているものの、患者と接する経験をしていないことから、臨床実習も終了している3年より主観的反応を示す語の割合が高かったと考えられる。臨床実習において患者と直に接することにより、精神分裂病患者に対する偏見や誤解の少ないイメージに変化していると推察される。金山らも、看護学生の精神病に関する意識構造において、1年次から3年次の看護教育により徐々に意識が変化し、恐怖・嫌悪の態度を示さなくなる傾向があることを明らかにしている²⁾。看護学生の病人に対するイメージは、講義・臨床実習というように段階的に学習を深めることにより、イメージする事柄が増加すると同時に、主観的な内容から専門的知識に基づく客観的な内容に変化することが示唆されたといえる。

V. 結 論

1. 「病人」をみた経験を有する学生は3年が最も多く、病人は主に入院患者であった。

「精神分裂病患者」についての経験は1・2年ではきわめて少なかった。

2. 「糖尿病患者」「癌患者」「精神分裂病患者」という刺激語に対して想起された連想語数はいずれの病人に対しても3年が最も多く、次いで2年が多かった。
3. 連想語を“客観的反応”と“主観的反応”でみると、“客観的反応”を示す語は、「糖尿病患者」「精神分裂病患者」については学年の進行に伴って有意に多くなり、「癌患者」については2年・3年が同じ割合で1年より有意に多かった。

VI. おわりに

今回の調査ではA大学医療技術短期大学部看護学科の包括的な教育の結果としての解釈に留まるが、今後は影響が強いと考えられる科目や臨床実習での経験内容等との関連性についても検討する必要があると考える。

文 献

- 1) Martha E. Rogers, 樋口康子, 中西睦子他訳: ロジャース看護論, 60, 医学書院, 1990.
- 2) 金山正子, 田中マキ子, 川本利恵子他: 精神病に対する看護学生の意識構造の変化—3年間の継続的研究—, 日本看護研究学会雑誌, 18(3), 21-29, 1995.
- 3) 奥宮暁子: 看護学生の障害者観, 日本看護科学会誌, 12(3), 20-21, 1992.
- 4) 佐藤蓉子, 石鍋圭子, 神山幸枝: 看護学生の病名等についてのイメージに関する研究—学年間のイメージの相違について—, 日本看護科学会誌, 8(3), 40-41, 1988.
- 5) 石井範子, 針生亨: 看護学生の「病人観」とその形成について (I) —看護教育を通しての「病気イメージ」と「病人イメージ」の変化を中心として—, 日本看護研究学会雑誌, 20(2), 7-25, 1997.
- 6) 石井範子, 平元泉: 連想語検査を用いた看護学生の病人に対するイメージの分析—看護教育を通じての病人イメージの変化を中心として—, 秋田大学医療技術短期大学部紀要, 7, 25-32, 1999.
- 7) 石井範子, 平元泉: 看護学生の病人イメージについて—「糖尿病患者」「癌患者」「精神分裂病患者」に対するイメージの学年別比較—, 日本看護科学会誌, 17(3), 94-95, 1997.

(40)

石井範子／連想語検査による看護学生の病人に対するイメージの分析

Analysis of Nursing Students' Images of "the Sick"
using a Word Association Test: Longitudinal Change of "the Sick" Image

Noriko ISHII Izumi HIRAMOTO Makiko HASEBE

Department of Nursing, College of Allied Medical Science, Akita University

The purpose of this study is to investigate the change of students' view of the sick through specialized nursing education. Students' images of diabetes mellitus, cancer and schizophrenia and those afflicted with them were studied.

The subjects were 78 first-year students, 71 second-year students and 63 third-year students of the nursing college.

It was found:

- 1) Third-year nursing college students had experience of contact with the sick, most of whom had been admitted to hospital.
Aside from third-year nursing college students, only a few students had experienced schizophrenia patients.
- 2) Third-year students produced the highest number of association words for the sick of all three illness.
- 3) The association words showed an increase in objectivity with progress through the college.